

七月の園藝

——幼稚園夏休の用意——

一、花壇

ダリーヤは休暇前に地際から三、四十糎位で脇芽の出で居る所で切つておく。かうしておくに秋にはこの芽が立派な枝になり、夏咲のものより一層美しい花が見られる。

草花の種子の出来たもので前月採り残りのものは早くとり、多年生のもので花の終つたものは花軸を地際の所で切取つておくなご花後の始末をつけておく。

菊、コスモス、サルビヤ等の芽先を摘んで少しでも多く枝を出させるやうにしておく。

秋咲のもので今成長盛りの草花には周りの雑草をとり、休暇前に一度施肥しておきたい。

又花後の始末をした空いた花壇には灰を撒いて、軟かく耕しておき、九月になつて直ぐ播種の出来るやうにしておく。

その他

垣根の朝顔、ルコウサウ等、垣根の高さにきついたもの

の先をこめておく。

二、鉢植に就て

各幼児持の鉢植は休暇中はなるべく家庭へ持ち歸らせて世話をさせたいものである。その爲に是等の鉢植にも一回施肥をする。鉢の周圍を浅く堀つて液肥の稀いものを入れ、又土を元の通りに均しておく。

幼稚園に残しておく鉢植は地に下して差支へないものになるべく鉢から抜いて地植にする。大方の場合灌水せずによすまれる。九月になつて又入用なものは鉢のまゝ地に埋めておくのも一つの方法で、これでも餘程乾燥を防ぐ事が出来る。

又日除を造る。か、小使室の近くに寄集めて灌水のし易いやうにしておくなご色々の用意をしておがねばならぬ。

朝顔の鉢

鉢植の朝顔は行燈仕立の外は蔓を常に切つて短かく作るのが普通である。蔓の摘み方一例を示す。

大 岩 金

最初の蔓に葉が數枚出て、それから次へ次へ出る葉の脇にまだ蕾が出来ない場合には、この蔓のなるべく下の方の脇芽の丈夫な所まで切返す。そしてこの脇芽を第二番蔓として伸ばして行く。この蔓が次第に伸びて葉を數枚つけた時にはたいてい次の葉腋からは蕾が出来るやうになる。一度蕾が出来ればそれより後は葉腋毎に蕾が着くのである。この蕾は一本の蔓には數個にきめて先をさめる。

一方又この蔓のなるべく下の方の脇芽の丈夫なものを一芽丈次の豫備蔓として伸ばし、他の芽は全部元からかきさる。そして前の枝の開花が終つたならば、豫備蔓の元の所で切りさる。

もし採種しやうと思ふ時はそのまゝさす。

豫備蔓の蕾も數個にきめて先をさめ、前同様の方法で第二の豫備蔓を作るのである。かく開花する蔓を豫備蔓と二本宛を出させ、後は常に摘みとり徒に蔓の繁茂する事を制限して行く時は、永く比較的大輪の花を咲かせる事が出来るのである。

三、野菜畑

收穫

馬鈴薯がお休前に收穫出来る。莖葉が少し枯れかけて來たのを適度さして堀る。馬鈴薯は薯が浅くはいつてゐるのので幼児の堀るのには好都合である。移植鏝があれば一層ら

くであるが、砂場用の杓子でも差支へない。

先づ一株宛地上部の莖を引張れば薯が離れて容易に抜ける。次に土を除く。少なくとも一株に數個、多い時は十個位ごろ／＼出て來る。貯藏するやうな場合には晴天續きの後で堀らない薯が早く腐敗する。

菜豆も莢の固くならない中に早く收穫するがよい。しかし來年の種子用にはなるべく早くなつたものの方がよいやうであるから残しておく必要があり、最近は殊にこのやうな豆類、薯類の種子は入手し難いのであるから、自家用位は残しておくやうにした方がよい。

四月播のソバも收穫出来る。

茄子、トマトの收穫も始まる。

手入れ

蔓有の菜豆は引續き長く收穫が出来るので時々追肥(灰類を多く)をする必要があるが、蔓無の方は早く收穫が終るから、終り次第株を抜き、休暇になる迄にはその後へ、手のかゝらないツルズのやうなものを播種するか、苗を植付けておくやうにする。

茄子、トマトには乾燥を防ぐため藁、又は實のない草を根元の周りに敷いておく。

トマトの脇芽摘みは休暇中も續けなければならぬので、此頃から時々依頼する小使に手傳はせて方法を心得さ

せておきたい。

里薯も乾燥を好まないものであるから敷藁をしておく方が安全である。

日除用のヘチマ、トウナス、インゲン、レイシなど支柱にそつてゐないものはそはせてくくりつけ早く柵にのぼらせるやうにしておく。

花壇と同様に野菜畑にも今成長盛りのものには休眼前には是非追肥を忘れないやうにせねばならない。

四、夏の雑草

畑仕事をする者が常に悩まされるのは雑草である。少し油断をするさう所かまはず繁茂する。わけて春先から夏にかけては多い。

幼稚園で利用出来さうなものもかなりある。「系統的保育案の實際」の中にあげてある、ヒルガホ、ツユクサ等はその一例である。ツユクサはさほご擴がるものでないから、差支へのない限り残しておく事にしよう。

ヒルガホは花が朝顔に似て朝顔の花のしぼんでしまつた眞晝に垣根なごに二、三輪咲いた所は可愛らしく、晝の材料にもなり、すて難いものゝ感じがする。しかし是の繁殖力は實に旺盛なもので、蔓の伸びる事はいふまでもなく、地下莖のはびこる事も甚だしく至る所に擴がつて行き節々に根を下すので、わずかに二、三纏を地中に残しても

容易に活着し、やがて芽を出して來るのである。このやうに、地下の部も、地上の種子に依つて忽に増えて行く。

尙垣根や、他の植物に纏りついたものは容易にきれないのでは出來得る限り早く取除かなければいけない。

その外害虫の宿所となり易いイタドリ、スギナ、種子の飛び易い、ツメクサ、カタバミ、或はキャツリグサ等種々雑草が茂るが、休眼前には一通りきれいに總掛りで除草しておきたいものである。その位にしておいても新學期の九月迄には充分庭の蟲の宿る草原にはなり勝なものである。

抜いた草の始末

ヒルガホ、イタドリ、スギナなど地下莖の始末のわるいものや、ツメクサ、カタバミなどやうに種子の飛び易いものは共に是等は早く乾かして焼いた方がよい。後の灰は直ぐ畑に入れて片付けておく。

種子のないもの、根の浅いものは目障にならない所に堆積して、少し水か下肥をかけた上に土を覆うておけば容易に腐熟し肥土が出来る。尙草のみを積まないで苺に敷いた數藁の取り除いたもの、花後の始末をしたもの、常緑樹の刈込をしたものなど取交ぜて堆積すれば、水分の多い草花や、草のために藁は早く腐り、草のみ積んだものより藁、木の葉の交つたものゝ方が一層よい肥土が得られるので兩得になるのである。